

前回会議・事前打合せの議事要旨

＜前回は振り返りながらの最初のコメント＞

【明石座長】

- ・現実を一旦無視しても結構なので、究極の理想を考えましょう。理想の地域にづくり必要なこと、課題を一緒に考えていきましょう。
- ・イメージが共有できるように具体的なモデルもバンバン出して行きましょう。
- ・発言はあくまでも主観的かつ、各々の価値観で結構。
- ・八方美人である必要はない。
- ・価値感からビジョンを作りましょう。自分の価値観から出発したビジョンを作りましょう。
- ・最終的にどういう理想的な田園地域づくりがいいのか、というところに持っていきたい。
- ・あくまでもビジョンありきで考えていきましょう
- ・本当にそんなことできるのかなってという心配は、日々進化する技術とか便利なツールにリクエストすればいい。
- ・失いつつあるものを残したり再生したり、再編集というものもぜひやっていきましょう。

【佐藤委員】

- ・すべきことは2つあると思っていて、一つ目は、これから地域を担っていく人材の育成もう一つは、この美しい景色を維持するための技術的な面での進歩。
- ・この会がなくなっても、ちゃんと継続できる地域づくりを考える必要がある。
- ・自分事として考える事が出来るのは、自分の市町村の単位だと思う。女性や若者が地域の中心にいる環境が理想だけれど、すでにある既存の組織の男女比を変えて欲しいとか、若者を起用して欲しいという所は正直難しい。だったら、今まで地域の運営に関わっていなかった女性や若者が入れる、男女比や年齢のバランスの取れた新しい組織を作ったらいいんじゃないのか。常に新しい情報を入れていける新しい組織を作るのいいのではないのか。
- ・やりたいことの一つ目は、これから地域を担っていく人材の育成をどうしていくのか。
- ・もう一つは、この美しい景色をどうやって担い手が少ない中で維持していくのか。
- ・この会がなくなっても、ちゃんと継続できる地域づくりのために、継続して新しい情報を入れていける新しい組織を作るのいいのではないのか。やっぱり自分事として考えるのは、自分の市町村の単位だと思う。既存の組織、その男女比を変えて欲しいとか年齢若くして欲しいという思いはあるが、正直なところは難しい。だったら、何者でもない人が入れるような新しい組織を作ったらいいんじゃないのか。

【山崎委員】

- ・田園風景を守るのはやっぱり農業。そこに住んでいる人たちと働いている人達がいないと維持できないので、これから担う人たちと今やっている現役で教えられる人たちが、一緒に取り組む体験会みたいなものがあるといいのかなと思う。

- ・テクノロジーを使ったり、創造性を育むためのアートを取り入れたり、みんなで何かを作ってその地域での価値を表現するみたいなところを組み込みながら、それがあの人にとっては仕事になるし、あの人にとっては趣味になるかもしれない。楽しみがないとそこに住もうと思わないので、地域内の楽しみを作る。作る部分をみんなでやる、多分新しいお祭りみたいなもの。そういったものをエコシステムの的に考えなきゃいけない。

【川端委員】

- ・朝日町の博物館で働いているが、住んでいるのは滑川市。どちらの関わりも中途半端になってしまうという悩みがある。
- ・朝日町において、歴史を地域の方に講演する業務があっても、朝日町の情報が入りづらい。町の広報や回覧板が自宅に届かないので役場へ見に行ったり、町のHPは“報告”がメインでイベント開催前にその情報にアクセスできない。
- ・一方、住んでいる地域のイベントには日中、参加できないもどかしさがある。
- ・そういった地域の情報を集約できるような（ネット上の）場所があればいい。
- ・何かモデルを示すことで、そういう地域を参考にしたいという地域が出てくるとか、何らかのモデルを示すことができれば、一つ一つ直していくよりもすそ野広く問題意識を持つ人たちが気づいて、取り入れやすくなるのかなと思う。

<テクノロジー>

【山崎委員】

- ・AIなど自動化する技術について、専門家と話をしながら実証実験をして、どこでも使えるような仕組みが欲しい。
- ・どこに穴があって穴埋めしなければいけないかという観点と、人口が減るけど生活や人間関係が豊かになるようにしていくという観点が大事。今住んでいる人たちと将来住みたい人たちがどういう姿を描いているかというのが重要な論点。
- ・それによって空間のデザインが変わってくるし、この景観のこれが素晴らしいからどういうルールを作るみたいなのを、その景観を守る主体になる人たちと一緒に作らなきゃいけない。

【佐藤委員】

- ・これだけ技術が進んでいるのに、なんで畔の草刈を人の手でやってるんだろう、なんでこんなに進んでないんだろうと思う。

【山崎委員】

- ・人口が減っている地域での農業維持のためのテクノロジーによるソリューションとして、GPSによる田植え機や畦道の草刈り機も実証実験の価値があるのではないかな。

【明石座長】

- ・ニーズがあることは間違いないので、そのニーズがしかるべきところに届かないことが問題。

<空き家>

【明石座長】

- ・単に物件という意味ではなく、大事な風景の一部。ただ山に田んぼがあって、木が生えているだけでは素敵だと思わない。良い暮らしがあって、暮らしがあるから家がある。
- ・「空き家活用」は、そういうフレーズがあって、活用しましょうと言うが、それが産業とか暮らしとかコミュニティとしっかりリンクしてない。

【山崎委員】

- ・井波ではデータベース化して、空き家になる前からその人達と家族ぐるみの情報交換をする。そのため潜在的に物件が空く可能性がわかっていて、どのタイミングでどういう人が来たら誰に話して、という可能性の議論ができる不動産屋さんがいて、それがあるから空き家が動く。
- ・そこでちゃんとデータベース化して、誰かがその役割を担って、空き家になる前からすでにもう声かけておいて、例えば、そこに住んでいるお年寄りの夫婦が何歳ぐらいでどういう健康状態で、その人たちの子供がどこにいてどういう感じかわかっていれば、探してる方々と話ができそう。条件があるんだったら、うちのおじいちゃんがぼけるまで何年ぐらいあるかなみたいな話ができる。

【明石座長】

- ・空き家調査はなかなか田園の方では進められてない。どんな人が住んでいて、今後どうなるかもわからないという状態で、そういうことを熱心にやる人が「仕事」としてやれたらいい。
- ・ある程度仕事として動けるような組織化をしないといけない。

【山崎委員】

- ・GISで作るデータベースと実際のデータを聞き取ったモデルがあれば、すぐ1週目ができて、その維持管理に1人のプロフェッショナルと例えばまちづくりを勉強したい大学生がいればデータの維持は可能。

【明石座長】

- ・共通フォーマットでどんどん管理画面に入れるようになっていけばいい。

【川端委員】

- ・空き家と山崎さんが発言された新しいお祭りというのが、まぜられたらいいなと思った。
- ・新潟のアートイベントである大地の芸術祭では、会場が空き家だったり廃校だったりする。市町村が異なるいろんな地域に跨っていて、かなり移動しなければならないが、期間中パスポートを持っていろんなところに行く。空き家にはなかなか入る機会がないが、作家さんが「自分はここの建物でやります」と決めれば、そこをアート会場にしてたくさん人が訪れる。
- ・そうするとまず空き家の調査も進むし、会場として1回再生される。もしそれがよければ、そのあとアート会場としてそのまま残されることもあるので、マネすればいいのでは。そしたらそこに教育だとかアートだとか、観光だとか、文化保護などいろんなものが入ってくる。

【川端委員】

- ・地域交通について。いろんな地域の廃村みたいなところへ行くと、廃村になったきっかけが、やっぱり交通の便が悪くなってしまったことにあたりする。村までの道ができれば、車で出られるようになって、都会に働きに出たりする。そうすると、そっちがいいから帰ってこなくなってしまう。
- ・あまりにも便利になって、そのコミュニティで過ごす必要がなくなってしまうと、人がいなくなり地域がつぶれてしまう。そのため交通はすごく難しい問題。
- ・新潟のアートイベントは、道がそんなにない。近くまで行ったらそこから歩いていかないとたどり着けないとかあるの。

【佐藤委員】

- ・アートとかクラフトと載せていくと田園地域ってすごく相性がいい。
- ・10月の立山クラフトでもE-バイクで会場から20分程度散策してもらおうが、その先にそういう古民家でアートがあれば、より周る目的ができる。

【山崎委員】

- ・デザインウィークポートランドでは、その町中のギャラリーと工房が全部オープンになり、みんな行く。それに合わせてクラフトビールのお店とかもやるから、自転車で回って飲んで見て、飲んで見て。年に1回、1週間の開催なので、普段タイミングが合わない作家さんとかオーナーさんと話をする事ができる。

<農業～災害>

【荻布委員】

- ・氷見の中山間地は農地が重粘土なので、耕作放棄地をお借りして耕そうとするときに、女性1人の力では機械なしでは耕すのが大変。そういった中で農業生産分野で自分が主体的に率先してできることとして、2点やりたいことがある。
- ・1点目は自家農園の農産物の加工。加工場を整備して、体に優しい料理につながるような加工品を作っていきたい。2点目は活用されていない果樹の経済化。先に述べた加工場を活用して商品開発をするなどして経済化し、果樹林の整備に人やお金が回せる体制につなげ、ひいては里山の保全につなげられるようにしたい。

【佐藤委員】

- ・中山間地域の強みは災害が起きても、その地域内でなんとか暮らせるということ。神戸で阪神・淡路大震災を経験し、東日本大震災のすぐ後から埼玉で生活をしたが、心のどこかに常にあった不安が富山に来てからなくなった。災害時も用水や湧き水があるしお米や野菜を育てている人が近くにいる。有事の時こそ田園地域は強い。

<通信環境>

【山崎委員】

- ・100年後に人がほとんどいなくなっても、集落が残ってそこで働きたい人たちがいて、ちゃんとお金稼いで幸せに暮らせるためには、絶対的に大事なのは綺麗な風景とおいしい食べ物とネット環境。それは外せない。

【荻布委員】

- ・私が住んでいる地域は光回線が通ったのが二、三年前ぐらい。家の中で通じないところがあったりする。スマホも満足に使いづらい状態。

【川端委員】

- ・私は朝日町の遺跡を案内することが多いが、説明する時に紙資料を持っていてもお客さんは荷物になるし、あまり見てもらえない。ホームページにアクセスできたり、画面を見られる環境になれば説明の補助になっていいなと思う。そういう施設はほしいWi-Fiがない。勤務する「まいぶんKAN」にもないし、国指定の史跡でもWi-Fiがないところが多い。

【明石座長】

- ・富山県が衛星インターネット：スターリンクの対象になっている。個人でもアンテナを立てれば、どこでも衛星インターネットが繋がる。山とか野原とかに強いので、相性はとてもいいんじゃないかと思う。自治体によっては、KDDIと提携して「うちの町にどんどん導入します」という震災に強いまちづくりをやっている。富山県として、田園地域でのこういう議論のベースとして、衛星インターネットの導入を自治体や民間と一緒に導入していきましょうという流れになればいいなと思っている。

<エネルギー～薪>

【山崎委員】

- ・これから震災は増えると思うので、エネルギーは分散化しないといけない。発電の分散化を考えて、長期的な戦略を組む中で、田園地域がやっぱり重要。
- ・各地域での最適な方法は、いかにそれを地域の人達と近いもので作るか。
- ・斜面に住む人たちは小水力発電を取り入れて、コミュニティの共同投資で発電設備を作って、普段余っている電気は売電して収入になるみたいなことを事業としてやれたら、それが仕事にもなる。メンテナンスも専門家が入るタイミングもあるけど、普段の草刈とか何だかんだみたいなのは、自分たちでできるというのはすごくコミュニティのオーナーシップが持ちやすい。月に1回とか何ヶ月に1回、フィルター掃除をしようとか、周りの草を刈ろうということが、小さなイベントだと思う。
- ・平野だったらソーラーが強いので、農家が一軒ずっと空いて何もしてないんだったらその敷地の一部とか屋根とかを使ってソーラー発電するとか、小規模の風力発電するみたいなことを、少しずつ考えながらやっていくと、人がいなくなっても営めるような場所が増えるのかなと思う。

【荻布委員】

- ・築 40 年ぐらいの空き家だった古民家に入居した際に、薪ボイラーにしてもらった。友人が林業やっているので薪を使える状況ではあるが、手間がかかるので、なかなか使いこなしているとはいえない状況。氷見は特に山が多いので、うまくもっと回せたらすごくいいだろうなというふうに思う。

【佐藤委員】

- ・我が家も冬は薪ストーブ。煮炊きをほとんど薪ストーブの上で行うので、ガス代は、冬はがくんと下がる。薪を使い始めると目の前の山々がやっかいな物ではなくちゃんとエネルギーとして見られるようになる。薪の調達は、廃材とか近所の人が剪定したものをもらったりする。

【荻布委員】

- ・薪は友人が林業やっているので、それがストックされている。また家の周りに薪を置いていると、それを見た近所の方が廃材をくださったり「廃材があるよ」と言ってくくださったりする。

【佐藤委員】

- ・立山町では、ペレットストーブの設置に助成金があり、最近対象に薪ストーブも含まれるようになった。

【明石座長】

- ・つつい山林はちょっと厄介な存在と思われがちだが、自然とか山がエネルギーだと思えば、見方も大分変わるし、そこにコミュニティ単位の仕事等が生まれる可能性もあるんだなと思った。薪ストーブを使っている知り合いは、いろいろ工夫して薪の調達を行っている。「仕事でやる人いないんですか」と言ったら、「仕事としては成立しない」と言っていたが、でもルートとか考えると不可能ではないんじゃないかって思ったりしている。
- ・いざという時の安心のためにどうなっても薪があれば何とかいけるっていう、そういう環境が整ったらいいなと思う。それこそ昔あったけど新しい仕事としては成立しそうな気がした。

【山崎委員】

- ・薪について。徳島の神山町に視察に行った際、その町を案内してくれた方が、月に 1 回程度、地域の人を集めて木を切る前に皮をむいておくとか、細かい薪に至るまでの流れを全部教育して見せてあげている。普通に切って運ぶのと、1 回皮をはいしてから放っておいて水が抜けてから運ぶのとでは、重さが大分違う。そういう細かいことを地域の人たちに教える。
- ・なぜかという、その町自体の根源がそもそも林業。すごく重要な産業の一つなので、継承する感じでやっているが、子供たちにとってはめっちゃくちゃ楽しい。うまくそれが循環してるなというのを、多分五、六年前に見てきて、他であんまりそういうこと見てない。子供たちが林とか森とかと木とかと触れ合うことが当たり前になっていけば、災害時でも自分たちでマネージできるようになる。

【川端委員】

- ・先日、氷見の論田熊無で箕を作る会に参加した。その体験会にお子さん連れで何年も通っている主婦の方がいて、お子さんも自然と箕作りをやるようになったらしい。
- ・伝統芸能の継承をやりませんか、という高齢の方が関心を持ってくれるが、それでは次の世代につながらないこともある。その点で、親子で参加することで子供が楽しく参加し、それが将来の仕事につながる取組みがあってもいいと思う。
- ・白山市に住む知り合いの女性が、薪ストーブを使っているが自分だけでは薪を集められないので、薪ストーブ所有者で集まって、月に何回か山に入って一緒に木を切ってきて、管理する倉庫をみんなで借りてきて薪を保管している。作業に従事している人たちは自由にそれを使えるという感じでやっている。そうすると1人の負担が少ないし、自分の得意な分野で役に立つとか役割分担できるのでそんなふうにしていくのもすごくいいなと思った。

<観光>

【明石座長】

- ・田園地域での観光って富山県はすごく弱いと思っている。他の県を見ていると、こんなところにもと思う場所に自然体験のワークショップがあったりする。富山にも存分にそういう地域があるにもかかわらず、使いきれてないなといつも残念に思っている。
- ・無理やり観光業としてやるよりも、さっきの薪コミュニティに入るだけすごくいろんな体験ができるわけだし、そういう薪コミュニティ的なものを作っていたら自然とその先に、外貨獲得の筋道があるような気がしてきた。

【山崎委員】

- ・田園の観光でやって欲しいなと思うのが、新米をその場で食べられる取組み。富山の米はおいしい。コンビニでもおにぎりが出ていたが、あれを現地で食べたい。それだったら友達を呼んでわざわざ行って、その農家さんを手伝って、ひと汗かいた後にあのおにぎりや日本酒とかでその日を終わりたいという体験があったら、ぜひやってほしい。

【荻布委員】

- ・田んぼ体験について、うちでは一昨年から田植えと稲刈りのときにイベントをやっている。昨年は新米の時期にはイセヒカリの稲刈りをしてもらって、その稲刈りイベントの前のタイミングで刈り取り・乾燥を終えていたその年のコシヒカリの新米を食べていただくというのをやった。
- ・もう1件、空き家を借りられそうなので、そこを整備できたら宿泊も加えた体験プログラムを実施したり、農家民泊、リトリートといった取組みもできたらと思っている。

【佐藤委員】

- ・小さい単位での観光が増えればいい。今度ファミリーワーケーションの受け入れをする。ホストファミリーとして、地域を案内するとか、歓迎会を開いてあげるとか、湧水を汲みに行くとかホテル探しに行く、そんなことを一緒にする予定。そういうのが増えたらいい。

- ・新潟で中越地震の被災地において、住民主体の復興・地域づくりに携わった、地域おこし協力隊サポートデスクスーパーバイザーの稲垣文彦さんが「外の人が、住民と普通に過ごすし、日常を体験する中で新鮮に喜ぶ姿が支援につながる【過ごす支援】」があるとおっしゃっていた。都会の人にとっては、地域の人とただ同じ生活をするのが、「すごいですね」につながる。普段の生活を喜ばれることで、地域の人がうれしい気持ちになる。これを参考に、観光とセットで地域の人々の小さな成功体験・自己肯定感が上がる取組みがあればいい。

【明石座長】

- ・無理やり観光を作ろうとすると、皆さん大変でどこかで無理がたたって、もうやめるわとなっちゃう。でも自然な流れの中で観光というとならえ方もできるねというぐらいの入り方がいいのかなと思う。
- ・多分、稲垣さんは震災の復興支援でそういう経験をいっぱいされているからその言葉が出たと思う。復興支援で外から人がいっぱい来たときに、多分山古志村とか普通に暮らしているけど、みんなが「すごい」とか「おいしい」と言ってくれるので、住民の方が「そうかな」となると思う。そういう関係だと、とても自然でいい。

【山崎委員】

- ・“観光業”というと、昭和・平成のイメージだと観光バスで大勢来てもらって、1人当たり単価×人数となってしまうが、21世紀の観光は体験重視のコミュニティ重視。人数が多いと参加者も受け入れ側も満足できないので、人数絞ってでも単価を上げないと観光業にならない。
- ・そうすると、食と体験といい宿というのを組み合わせなきゃいけない。それがサステイナブルな観光のツールだと思う。だから観光業という言葉すら使わない方が良くて、このラベルがよくない。
- ・本当にその地域のものを味わうためのツーリズムとして、「富山に行ったらあれあるよね」というものが我々が予想しようとしている観光。その中でこの風景の中にあるコミュニティとか空間とか林業とかエネルギーとかがおのずと組み込まれていちいち説明することもなく、よく考えたら全部組み込まれているという体験がいいと思う。サステイナブルでサーキュラーな感じでいくというのが、将来の観光業の目指す姿かなと思う。

<空間デザイン～ラベルの貼り替え>

【明石座長】

- ・空間デザインにおいては、窓枠効果がよく使われる。大きい伝統建築のちょっと暗い中で、外の伸び伸びとしたにぎやかな田園を見ると、より美しく「ここ本当にいいな」と見える効果。この会場の六角堂もそういう意識があって、多分近所の方は六角堂の建物の中から外を見ると、「おや、こんな町だっけ」という見え方すると思う。
- ・それをうまく使って魅力を伝えるという方法もありなのかなと。何かを特別に建てるのではなくて、ここから見るとすてきだよという場所を与えてあげるだけでいいんじゃないかなという気はしている。

【山崎委員】

- ・先日、天王洲アイルで、映画監督の「ウェス・アンダーソンすぎる風景展」に行った。本人ではなく、それっぽい写真を世界中からインスタグラムで集めて、その中から選ばれた人たちの写真が展示されているというもの。平日の午後に行ったが、20代30代の女性ばかりで、実は誰もウェス・アンダーソンを知らない。その場にある写真が見たくて集まっている。
- ・インスタの写真なので、窓枠効果的に枠を決めて美しい写真を切り取って、それを愛でる・喜ぶというのが最近の人々の文化にある。それはすごく重要で、この場所に行ったらこれ見られるんだよというのを、例えばウェブ上に載せておくとかインスタなどで作ると面白いと思う。

【荻布委員】

- ・氷見の論田熊無の伝承料理教室で山菜料理を食べた際に、私にとってはすでに馴染みがあるものもあったが、ちょうどその日に県外からお嫁にこられた方と会う予定があったので、もしかして興味を持たれるかも、と思って持っていったらすごく感動された。だんだん私も当たり前になってしまっていたが、山菜料理とか田舎料理があんまりまだ（パッケージや発信方法において）おしゃれにリデザインされているものが少ないかもしれないと思った。

【山崎委員】

- ・レヴォとか行くと、山菜が超高級な器でちょこっと出る。山菜が高級料理になるという例が既に存在しているので、それを山菜が取れる集落でもうまく提供できるようにすることが重要

【明石座長】

- ・（観光分野で山崎委員からご発言のあった）ラベルというのはすごく良いワードをいただいた。ラベルを変えてみて、その伝わり方が変わるとか価値観の変化が生まれるということが大いにあると思う。ハード整備で新しいものを登場させるのではなくまず富山県にあるものでちょっとラベルを貼り替えてみてどうするか、というところから取り組むと面白いのではないかな。

<文化財>

【川端委員】

- ・自分の住む地域を大事に思ったりここに住みたい、大好きと思うためにはその地域の歴史という深みが必要。バンクーバーに留学していた時にクラスの仲間にメキシコの女性がいる、英語とかペラペラでこのままここに住めるぐらいだねみたいなことを言ったら、メキシコは歴史が深いので、そういう所に住みたいと言われた。典子は、と聞かれて日本は語ることがいっぱいある国なので、すごく語ることができた。
- ・そういう感じで、富山に住んでいるのもその地域性を知っているから。観光につながらなかったとしても、自分自身のために各地域の地域性がそれぞれにあるので、それを知っているからここに住んでいるという地域だったらいいなと思う。

【山崎委員】

- ・岩手県の紫波町に行った時に図書館の学芸員さんが、言い伝えのデジタルアーカイブみたいのを一生懸命作っていた。言い伝えというぐらいで、誰かが言ってくれないと伝わらないし、その方が亡

なくなったらもう終わりみたいな。それをデジタルアーカイブにするというのはすごく重要だと感じた。

- ・将来の研究者とか町のために、例えばビジョン作るときに掘り返せるものがあるというのは重要。わざわざ出かけて行って、皆さんの声を拾って見える化するみたいなことは、将来のコミュニティづくりで重要になってくると思う。

【明石座長】

- ・昭和時代にそういう調査をやった時代があったが、更新されていない。せめて10年に1回ぐらいはやらないといけない。それが仕事としてできるようになればいいないつも思っていて、学芸員さんの人数だけでは到底無理ですし、やっぱり縦の繋がりも作っていきながらのことなので、捉え直す必要あるんじゃないかなと思う。

【川端委員】

- ・今おっしゃった昭和の時代の調査は、朝日町だと婦人ボランティアさんの会みたいな生涯学習系で、昭和30年代以降ぐらいから増えてきた。その頃の聞き取りとか収集物とかは結構ある。でもそのあと、ちょっとすたれちゃったのか、なくなってしまった。
- ・やっぱり富山県の博物館がない。立山博物館や埋蔵文化財センターはあるが、県の博物館がない。博物館は地域の起爆剤とかベースになるところなので、知のアーカイブもあるし物のアーカイブもあるので、そこすごく大事なところ。

【明石座長】

- ・僕も博物館がないのはどうかなと実は思っている。新潟県の博物館はすごく面白い。博物館はやっぱり文化継承の中心地。博物館は地域の文化なので、もっと力を入れるべき。
- ・そういう博物館こそ田園地域にあったらいいと思っていて、その周辺にまた博物館を匂わせるようなコミュニティがあったりとか場所だったりっていう連鎖があれば、田園地域が魅力的になるのかなと思う。

【佐藤委員】

- ・ウェルビーイング戦略プロジェクトチームでは、中高生のうちどれだけ富山のことに関わったり、富山に魅力を感じるかということが、その後の少子化対策とか、1度県外に出た女性が富山県に戻ってくるかという所で大きく関わってくるということが話されている。
- ・探求学習が昨年から高校生の必修科目になっていて、氷見高校では地域と絡めた数々のプロジェクトがすでに始まっている。そういう探求学習とデジタルアーカイブとがリンクできたらいい。

【荻布委員】

- ・私は曳山と獅子舞がすごく好き。富山の広範囲に地域ごとの特性を持った獅子舞などがあるので、その魅力発信やブランディングを底上げできないかと思う。以前に東南アジア各国の青年と交流した際、その人たちが普通に現地の伝統芸能について当事者として演じられるのがすごいと感じていたが、富山の人でもそれができる。その素晴らしさを多くの人が再認識できるといい。